

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第31回)

## エジンバラ国際フェスティバル

1985年8月にエジンバラへ行った時のこと。毎年この時期、エジンバラではパフォーミングアーツの国際フェスティバルが開かれる。大きな舞台公演から小さな大道芸まで様々なパフォーマーたちが世界中から集まってくる。85年は、日本から演出家の蜷川幸雄氏が『NINAGAWAマクベス』を初めてイギリスへ（つまりこのフェスティバルへ）持って行った年だ。その初日、会場のロイヤル・ライシャム劇場へ行ってみると、この公演は前評判が高くチケットは完売だと言う。父が翻訳者、ということもあり、あらかじめプロデューサーに頼んでおいたのだが、あまりにも人気が高く、無理かもしれないと言われてしまった。諦めきれずに、とりあえず中へ入れてもらって、開幕まで、1階席最後列の後ろの通路に立っていると、隣で蜷川さんが「なんだよ、ディレクターズ・チェアとかないのかよ」とぼやきながら立っていた（蜷川さん、それは映画です）。

しばらく待っているうちに、プロデューサーが「何とかなりました」と2階席へ案内してくれたのだが…え？ いいんですか？ なんと、ボックス席にお邪魔させてもらえたのだ。ボックス席はボックスごと購入するらしく、その中に何人座っても（と言っても、椅子の数だけ）いいので、余っているところに座らせてもらえたのだ。正装し

た、いかにもやんごとなき老嬢たちに囲まれて見ることになった。いかにも貧しそうな旅行者の身なりだったのに…。

さて、公演終了後、観客席は完全なスタンディングオベーション、ものすごい反応だった。誰もが舞台に魅入られて、拍手がいつまでも鳴りやまない。僕のいたボックス内では、盛んに老嬢たちが僕に向かって拍手してくるので、いや、僕は何もしていませんが、と説明するのがやっとだった。

次の日、感動冷めやらぬまま、他の予定をキャンセルしてもう一度ロイヤル・ライシャム劇場へ。だが、もちろん、今度こそチケットはどうにもならない。すると、スタッフの一人が「こっちこっち」と3階席の更の上の最上階へ連れて行ってくれた。そこは、昔は天井桟敷として観客に開放されていたかもしれないが、今では照明器具などの操作でスタッフだけが使っている空間だった。見ると、結構スタッフのコネで上がり込んだらしい（僕みたいな）若者が大勢いる。終演後、興奮した彼らに「君、日本人だよな？ 俺の感想を伝えてくれ！」と囲まれてしまった。前夜同様、ものすごい熱狂ぶりだ。どうやら、演劇への情熱やリアクションは、席の高い低い（金銭的にも物理的にも）関係ないようだ。